

空手道詳説（33）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その6. 薩摩侵攻後の琉球）

（1）尚寧王以後の歴代王

薩摩藩による極めて意図的かつ計画的な琉球侵攻は、琉球国にとって開闢以来初めて他国による支配という屈辱とともに、長年にわたり物心両面に大打撃を被ることになった。

不運にも、その場面に在位した尚寧王に至っては、俘囚の身となり鹿児島に連行され、徳川将軍の前に平伏させられてしまう。

尚寧王は、この身の上を単に嘆くに止まらず、以前にも触れた第二尚氏王統3代尚真王の母、宇喜也嘉が子を即位させるため廃嫡とした尚真王長男（世子）の尚維衡の血を引き、玉陵（タマウドゥン、王家の墓陵）の碑文に名のない者の子孫が即位したことへの祟りが国難を招いたと、自虐の思いに苛まされながら生涯を送るのであった。

第7代尚寧王が1620年に崩御し尚豊王が即位するが、それ以降最後の琉球王となる第19代尚泰王まで250年余りの間、歴代の王を以下簡潔に記す。

- ・ 第8代尚豊王（1590～1640年、在位1621～40年）
尚寧王が1620年56歳で崩御したが子女がなかったため、第5代尚元王の三男尚久の四男尚豊が即位した。1636年、琉球国王の称号を薩摩から剥奪され、「琉球国司」を名乗る。尚豊の時代にサトウキビ栽培がはじまる。1631年から在藩奉行が在琉し、34年に慶賀使、恩謝使が派遣され、これが慶賀恩謝使派遣の始まりとなる。
- ・ 第9代尚賢王（1625～47年、在位1641～47年）
尚豊の3男で、生誕時から鹿児島で育ったという。17歳で即位し、23歳で崩御する。1645年、砂糖とウコンの専売制が開始される。
- ・ 第10代尚質王（1629～68年、在位1648～68年）
尚質の崩御により、尚賢王の弟・尚質が19歳で即位する。この代、1650年に羽地朝秀が王命により琉球国通史「中山世鑑」を和文にて編纂し、後に朝秀は摂政とな

る。1660年、失火により首里城が消失する。

- 第11代尚貞王（1646～1709年、在位1669～1709年）
尚質王の長男で、この代に系図座を創設し、士分の者から系図を出させた。また、百姓の身売り防止や、高利子制限の令達を出す。久米三十六姓の中の一人である蔡鐸（1645～1725年。後出の蔡温の父）が「中山世鑑」を漢文に訳し、部分的に修正を加え「中山世譜」を編集する。
- 第12代尚益王（1678～1712年、在位1710～12年）
尚質の世子尚純が父より早く薨去したため、尚純の子尚益が23歳で即位した。しかし、在位2年間で崩御した。
- 第13代尚敬王（1700～51年、在位1713～51年）
尚益王の世子で14歳で即位する。蔡温（1682～1762年）を重用し、三司官に登用し多くの改革に当たらせる他、教育や文化振興、窮民救済にも力点を置き、その手腕は高く評価され名君と言われた。1712年、薩摩から許されて「琉球国司」から「琉球国王」に復した。1715年、首里城が再建される。
- 第14代尚穆王（1739～94年、在位1752～94年）
尚穆（しょうぼく）王は尚敬の世子で、「琉球科律」（罪の等級などの法令）を定め、国民の模範となる者に対する褒賞制度を整備した。1771年、八重山地震による大津波で、先島諸島の被害甚大。
- 第15代尚温王（1784～04年、在位1795～1802年）
尚穆の長男尚哲は世子であったが尚穆より早く薨去したため、尚哲の子の尚温が11歳で即位した。1801年、国学の「平等学校」を創設するが、尚温は在位7年で崩御する。
- 第16代尚成王（1800～03年、在位1803年）
父は尚温王で、3歳で即位するが1年を経ずして崩御する。
- 第17代尚灝王（1787～1834年、在位1804～34年）
尚灝（しょうこう）王は尚穆王の孫で、尚温王の弟。首里、那覇、泊に学校を設立し、宮古や八重山方面に派遣医師を増員し、先の「琉球科律」を補追する「新集科律」を定めた。この時代には頻繁に外国船が来琉するようになる。特に、イギリス軍艦アルセスト号とライラ号の来島は、ライラ号の船長ベイジル・ホールが琉球の民との交流を著した「朝鮮・琉球航海記」については後に述べることにしたい。王は、晩年精神病を患ったため、1828年に世子の尚育が摂政に着位した。発病してから坊主御主（ぼうずうしゅう）と呼ばれた。
- 第18代尚育王（1813～47年、在位1835～47年）
前代の尚灝王の長男で、15歳で尚灝王の摂政になり、前王の崩御により即位したのは22歳であった。士族教育のため学校を作るなど学問分野に力を入れるが、それが基というだけだないだろうが、財政の逼迫をきたす。西欧諸国は鎖国政策を敷いている日本及び琉球に対し、開国を求めて強い関心を示す最中であつた。在位中の

1844年フランス海軍が那覇に来航すると、貿易と宣教師の滞在を許可した。2年後には開国を迫られ、同年イギリス海軍が同様に那覇に入港し、宣教師が逗留したと薩摩への報告記録が残されている。このような喧噪の中、47年34歳で崩御している。

- 第19代尚泰王（1843～1901年、在位1848～72年）
尚育王の2男（長男は父王在位中に薨去）の尚泰は、父王の崩御により7歳で即位し、1854年、琉球・アメリカ修好条約に調印する。明治維新後の1872年（明治5年）琉球藩王に封じられ、1879年（明治12年）には沖縄県が設置されて王位は消滅し、首里城から出て東京移住を命ぜられ、侯爵として東京へ居を移した。



琉球最後の王・尚泰

（2）琉球への欧米船などの来航

17世紀半ばころには世界の全域にヨーロッパ人が到達して、「大航海時代」といわれた時代は終わりを告げ、世界中の富が集中するようになったイギリスをはじめとするヨーロッパ諸国は、更に18世紀半ばから19世紀にかけてイギリスを起点とした産業革命の成功により、世界に覇をとるよう一層アジア諸国への進出を計っていた。

このような状況の中、それまで限られた国々との交流が主だった琉球にも、次第に優れた航海術を持つヨーロッパ船の訪琉が増えていく。

- 1797年、イギリスの測量船プロビデンス号（館長ウイリアム・ブロートン）が宮古多良間島沖で難破するが、同年那覇に寄港する。1804年、ブロートンが「北太平洋踏査録」を刊行する。
- 1803年、イギリス船フレデリック号が那覇に寄港する。
- 1816年、イギリス艦船ライラ号とアルセスト号が那覇に40日にわたって寄港。1818年、ライラ号の船長バジル・ホールが「朝鮮・琉球航海記」を刊行し、世界的ベストセラーとなる。同じくライラ号の海軍大尉クリフォードが「クリフォード訪琉日記」を残す。
- 1827年、イギリス船ブロッサム号（船長フレデリック・ビーチー）来航。1831年ビーチーが「ビーチー太平洋航海踏査録」を刊行。
- 1832年、イギリス船ロードアーマスト号漂着する。

- 1843年、イギリス軍艦サマラン号が宮古・八重山の地形を測量する。1848年、「サマラン号航海記」刊行する。
- 1844年、フランス軍艦アルクメーヌ号那覇に入港。琉球に対し和好通商を求める。回答は後に寄港する艦船に行くよう託し、宣教師フォルカードを残し中国に向かう。
- 1846年、イギリス船スターリング号が那覇に来航し、宣教師ベッテルハイムを残す。
- 1846年、フランス船サビーヌ号が那覇に来航し、宣教師フォルカードの後任としてル・デュルデュを残す。その後、同船はクレオパートル号、ビクトリユーズ号とともに運天港に集結し、2年前に要求した和好通商の回答を求めるが、琉球側はこれを拒否する。
- 1849年、イギリス船来航し和好通商を求める。他にも久米島や宮古島に異国船来航する。
- 1851年、ジョン万次郎（1827～98年、）とその仲間が、上海経由で帰国途中に来港し、番所で尋問の後に薩摩に送られる。他にも異国船の来航しきり。
- 1852年、中国（清国）人労働者を乗せたイギリス船ロバート・バウン号が石垣島に漂着する。
- 1853年、アメリカ海軍提督マシュー・ペリー（1794～1858年）がミシシッピー号を旗艦とする4隻で那覇に来航し、自由貿易を要求する。その後日本に向かって航行し、7月

8 ジョン万次郎

日、浦賀（神奈川県）に入港している。

- 1854年、ペリー提督との間に「琉球・アメリカ修好条約」を調印する。後の1856年「日本遠征記」（ペリー監修）が刊行される。
- 1854年、ロシア船パルラダ号でプチャーチン来航する。



マシュー・ペリー

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 藤原稜三著「格闘技の歴史」、1990年3月30日第1版、ベースボールマガジン社発行
- ・ 上地完英監修「詳説沖縄空手道」、1977年11月1日上地流空手道協会発行
- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 井沢元彦著「日本史集中講座」、平成19年6月20日初版、祥伝社発行